

探究学習を支える 主体性と多様性がもたらす豊かな道のり

片岡 則夫*

1. はじめに

ただいまご紹介いただきました片岡と申します。今日はこれまで取り組んできた実践の中で考えてきたことを、少しは役に立って肩の凝らない形でお話ができたらと思っています。

お話しする項目は4つあります。1つは図書館の仕事を長くやっていますので、現在の勤め先である清教学園の学校図書館リブラリアのことです。2つ目にそこで実践している中学生の卒業論文「なんでやねん」の様子をお話しします。3つ目に、私が長年携わっている探究学習に関して、大事にしていることをお話しします。「自ら課題を見つけて、自ら学ぶ」という学びの大切さです。そして最後の4つ目として、私も大学院を出ましたので、大学院で考えたことをお話しできたらと思っています。今日は院生の方が多いいということですが、院で学んだことこそが今の私を作っている、というお話をします。よろしくをお願いします。

さて、振り返ってみますと、私が初めて『情報大航海術：テーマのつかみ方・情報の調べ方・情報のまとめ方』を出版したのは1997年ですから、もう四半世紀前の話になります。昨年2021年には、筑摩書房から『マイテーマの探し方：探求学習ってどうやるの?』を上梓しました。考えてみると、昔も今もやっていることは一緒です。子どもたちが自分で何を学びたいかを考えて、それを何かしらの作品にしていく、その手助けをする授業をずっとやってきまし

た。そこで重要な機能が図書館なんです。

2. 清教学園とリブラリア

清教学園はキリスト教主義の学校です。大阪府の河内長野市のもうちょっとで和歌山県というところにあります。2007年からそこで授業をしています。この清教学園の図書館が「リブラリア」です。中高一貫校ですので、中学生と高校生と一緒にやってきます。図書館の横に総合学習室という教室があり、そこで授業をしています。

蔵書数が70833冊、中学生1人当たりの貸出冊数が年間約50冊です。蔵書が多く見えますが、生徒が多いので1人当たりにすると平均的です。一方、貸出は探究学習で増えますので、それなりに多い方かなと思います。

次に図書館の中を写真でご覧いただきます。本棚にサインが多いことに気づかれると思います。それも、公共図書館や大学図書館では見ないようなサインが多くあります。遊園地とか化粧とかゲームや文房具…。子どもたちが興味を持っている本が増えるとサインが付きます。

さらに一つ注目していただきたいのがこの「各種の演劇」という棚です。ここはほぼミュージカルです。ミュージカル好きの生徒が結構いるんです。だいたい話題になるのは宝塚、そして劇団四季、それから「オペラ座の怪人」。大体この3つで収まりますが、宝塚の本が多いです。さらによく見ると、子どもたちが作った

*清教学園中・高等学校探究科教諭／公益財団法人図書館振興財団教育支援室長

論文や作品が本棚に入っています。つまり、生徒が論文を作って、それを印刷・製本して、バーコードを貼って蔵書にしています。それが今2、000冊くらい書架にあるわけです。ようは、子どもたちが例えば宝塚のことを知りたいと思ってそのサインのある棚に行くと、先輩の論文が待っている、というわけです。そんな本棚を作りたいと思って、大体考えたような本棚になったと思っています。(論文の実物回覧)

3. 中学生の卒業論文「なんでやねん」

では蔵書になるような作品が出来てくるカリキュラムについて、少しお話をしたいと思います。中学校のカリキュラムに総合学習がありますよね。清教学園では週1時間の総合学習を図書館でやっています。そこで中1から中3まで探究学習をしています。なぜならば、総合学習の目的の第一が、「自ら課題を見つけ、自ら学ぶ」だからです。中1の時に小さな調べ学習、中2の後半から卒業研究を始めて、中学3年生で卒業論文を仕上げる、という感じです。2007年くらいから現在に至るまで、在籍者数で言うと三千人を超える子どもたちがいて、その子どもたちが毎年150~170点くらいの論文や作品を提出します。そのデータを記録して統計を取って、いろいろなことを言ったりしているというわけです。

探究学習について様々なことが言われますが、私自身が考えている探究学習の分類について少しお話をします。規模の小さなものから大きな探究学習があつて、規模が大きくなるほど時間がかかり難しくなります。例えば、大学院生の皆さんが論文を書くというのは、一番難易度の高い、時間のかかる探究学習です。うちの中学生がやっている卒業論文は1年で約30時間のカリキュラムです。とはいえ、最初はミニ調べる学習だとか、本から引用するみたいなごく小さな学習から始めます。それを繰り返しながら、

中学の場合は最終的に卒業論文に持っていかうという作戦です。

ここで、この論文が生まれる「なんでやねん」という授業の生徒の様子をお見せしましょう。とはいえ、写真を見てもちっとも面白くなくて、みんなコンピューターに向かってキーボードを打っているだけです。コロナの前の写真です。実際は和気あいあいとやっていますね。

卒業論文とは

この卒業論文の授業ではどんなことを言っているかという、まずは卒業論文の定義です。①テーマ(問い)を設定し、②先行研究やフィールドワークを踏まえ、③結論(答え)を論理的に主張する文書、これが定義です。論文というのは子どもたちが問いを立ててまとめるのですが、これは非常に難しい。だからその「問いを立てる」が大きな目標になります。

ちなみに、テーマの条件が4つあります。①興味を持ち、人に伝える価値がある、②学年全員が違う題材、③資料があり、自力で扱える、④テーマは「問い」になる、の4つです。「興味を持つ」と簡単に書いてありますが、興味を持ったことを題材やテーマにできるというのも、子どもたちにとっては大変ですね。子どもたちはわざわざ興味を持たないテーマを選んだりする傾向がありますが、それはまた後から説明します。「人に伝える価値のあるテーマ」とはどういうことかという、簡単に言えば先生を説得できるかどうかです。先生が説得できれば基本的に何をやってもOKです。もう少し別の言い方をすると、先生を説得するだけの本を積み上げて熱く語ってくれれば、大概のことはOKになります。

「資料があり、自力で扱える」というのも大変ですね。中学生ですからふつう英語文献は読めません。学術書も難しい。ですから自分で

扱える児童書や一般書を、まず資料として生徒は読んでおかなければなりません。

論文の完成の条件は、「ピース」という論文の単位・内容の塊が20個くらいある、取材など何かしらのプロジェクトをやっているです。もちろんテーマが問いでこれに結論として答えておかなければなりません。これがどれくらい大変か、生徒たちには最初は分からないというのが面白いところです。

コロナの後でみんなマスクをしている写真もあります。いかにもまじめにやっていますね。提出間際になると他の子どもたちはおしゃべりする余裕がなくなってくるんです。我々の言葉で「探究の天使が降りてきた」というのですが、読書と執筆の時間が続きます。

では、こんな風に最初から一生懸命みな学習に励むかというと、全然違います。最初はそもそも題材が決まりません。教室はもっとガチャガチャしています。テーマは「問い」ですが、それ以前の題材が決まらないのです。その状態では、本を読んでもつまらない、やる気も出ない、何をしてもいか分からない。そんな事態が結構長く続く生徒もいます。もちろん、そうでない生徒もいます。大学生も卒業論文を書きますが、同じ研究室の中でも早々進む学生もいれば、いつまでもテーマが決まらない学生もいますよね。それと一緒にです。

やる気が出ていない生徒の読書を見ていると、本を読んではいるのですが、読んでいて「感動詞」が出てこないんですね。「へー」「なるほど」「？」…といった、面白いとか、納得したとか、不思議だといった感想が出てこない。このように、読書をしていてもリアクションがない読書をしている生徒が多いんです。彼らは、先生が「本を読め」と言っているから読まされている。あるいは読んでいるフリをしている状態が多いです。目に生気がないですよ。やはり読書というのは感動詞がでてなんぼです。コンサート

のコール&レスポンスです。コンサートの中で「Are You Ready?」と言ったら「Yeah!」でしょ。そうしたやり取りが本との間にないと読書したことにならないよ。だから、そういう掛け合いできるアイドルを本の中に見つけてね、とっています。本は皆さんに様々な情報を語りかけています。それに対して、面白いとか、変だとか、楽しいとかリアクションが出てこそ読書が始まるんだよ、と。ではどうしたらそんな読書ができるかと言うと、「自分のアイドルは自分で探さしかないでしょ」と言っています。アイドルや推しは人によって違うから。みんながK-POPやジャニーズを好きなわけじゃない。自分だけのアイドル（本）はその人にしかわからないのだから、周りをキョロキョロ見てもしょうがない。自分が「この本が面白い」と思えばそれが正解なんです。

子どもが実際にテーマにしているのは、スライドのイラストのように、キャンプや釣りだったり、スターバックス、地獄、特撮映画だったりします。子どもたちが楽しいなと思って本を読み出せば、あとは本が彼らをかかなりのところまでつれていってくれるのです。ここまですが我々学校図書館としては、手間のかけ所だなど思っています。司書のレファレンスが不可欠なのはいうまでもありません。

テーマ設定を難しくする誤解

テーマ設定や題材探しは本当に難しいです。それはなぜかというと、彼らの中にテーマ設定を難しくしてしまう「誤解」あるからではないかということ、長年相手をしながら考え方を整理してきました。一番大きいのが「学習手段説」です。どういうことかということ、学校で学習するというのは「成績の手段」であるという考え方です。言い方を変えると、何か報酬を得るため、あるいは罰則を避けるために勉強するんだという考え方です。すると、良い成績のた

めにはコスパが大事となる。コスパが大事なら遠回りは当然無駄で、近道がどこかにあるはず、というような強い思い込みが彼らの中に育つ。そのような気がしてなりません。

つい最近の話ですが、生徒が「税理士」を題材にしたいと言ってきました。ところが、全然覇気のない草稿を上げてくるので、税理士に興味があるのかと聞いたら、「興味がない」と言う。詳しく聞くと、興味があるのは実は数学だったのですが、数学は中学生がいくら頑張ってもダメなんじゃないかと思いついて。そうとなれば、興味はないけれどもやはり近道は税理士だ、考えたんです。それでスタッフみんなで寄ってたかって、興味ないことやっちゃダメだと言って、ようやく数学のユークリッド幾何学の話が彼から出てくるようになり、一転熱心に取り組むようになりました。そういう遠回りをするんですね。似たケースはよくあります。

他にも様々な誤解(評価分量説、研究筆者説、悩めば解決説、天下り説…)がありますが、今日もうひとつだけ紹介しておきます。「キャラ優先説」という考え方です。これを話すと大学生がとても共感するんですけども、中高生というのはクラスや学校での人間関係を、大げさという命の次ぐらいに大事にします。自分はこの教室の中でこう見られているから、こういうテーマや題材が適当だろう、という思考回路があるんですね。だから、本当のところはボーカロイドが自分は好きだけれども、ボーカロイドが好きな人間には見られたくないから、紅茶の勉強をする。そういう風に仮面をかぶるんですね。紅茶にそんなに興味はないんですよ。興味がないんだからさっさとやめなきゃ、と諭すんですけどもなかなかそこに居ついて動きません。

女子生徒の場合は、チョコレート、アイスクリーム、ヨーグルト、色彩などが出てきたら、

僕はちょっと警戒します。ただそうでない子も中にいるので、一概には言えません。男子生徒にもいます。男子の場合はキャラ優先の場合ウケに走ります。サツマイモとかバナナとか。「あいつバナナだって。超ウケる」と言われて嬉しいから題材を選ぶ。バナナに興味あるかということ、そんなにありはしないんです。もちろんウケる賞味期限は長くありません。2ヶ月も3ヶ月もバナナ、バナナと言ってウケるわけがないので、いずれやめる。この「キャラ優先説」というのは、学校社会独特の誤解かもしれません。つまり、自分が好きで面白いと思ったものに正直に取り組ませないような人間関係があるのです。だから自分の興味に正直にすぐに食いつく子はクラスの中では、目立たない子だったり、不思議ちゃんだったり、我が道を行く子の場合が多いです。そういう子が「私は地獄をやりたい」と言う。他の子は引くかもしれないけれど、自分の興味に従うのです。で、そうした子にながら起こるか。本を積み上げて読むのは当然として、フィールドワークが俄然おもしろくなる。取材をしようと調べると、愛知教育大学には地獄の専門家いました。その先生のところに手紙を書いて、出かけて行って、延々とお話を聞いてくるわけです。3時間ぐらいお話を聞いて、すごく盛り上がり満足して帰ってくる。それをあとから文字起こしたものを読んで知るので。つまり、面白いと腹を据えた生徒はしばしば幸運を引き寄せる。とはいえ、そこに行き着くまでは、本当に面倒くさいのが今の中学生かなと思います。

ではふりかえって、中学生がなぜそういう誤解にまみれてしまうのか。一つは偏った学習経験です。彼らにはインシニアチブ、つまり主導権を持った学習経験がほとんどないのです。言ってみれば、小学校に入って中学校3年生になるまで、「君は何を学びたいのか」と問われたことがほとんどない。同時に自分が好きなことを

学んで、肯定される機会が少なかった。「興味を持つっていいね」とか、「面白いと思った本を読むのは大事だよ」という反応を周囲が示していれば、学習手段説のような学習観がはびこるはずがないからです。清教学園も入試があるので試験勉強はしてきています。しかし、「よそ見するな」「脇道それるな」とずっと言われ続けていると、それが彼らの中に不健康な学習観を定着させてしてしまっているのかもしれない。つまり、「イニシアチブを持って学ぶ」経験のないまま大きくなってしまっている。それがこれらの誤解の原因かなということ。

もう一つは読書不足ですね。読書でなくてもいいのですが、映画を観るとか、マンガにのめりこむとか、自分の中で「自分はこういうのが好きだ」という世界を育てている子は強いです。のめりこんだだけ色々なことを知っています。語る言葉が多いです。授業中に例えば「最近のアイスクリームってどうなの？」と問えば、アイスクリームはあそこのメーカーはこうで、ここのメーカーがこうで、値段がこうで、成分がこうで…、とスイッチが入る。あまりの饒舌にこちらが「あー、わかった、わかった」と相手手を制しないといけないくらいならその子は安心です。ところが「キャラ優先説」のアイスクリームの子は、「アイスクリームですか？ 別に…」とか言うんですよ。「何が別なんだ。何と何が別なんだ、言ってみろ」なんて、こちらも言葉に棘が出てきます。そうした子は動機が語れず結局やめる。

考えてみるとかわいそうです。自分の世界を育てる暇なく、むしろ学校や家庭から「こういうことが大事だ」と次から次に指示されて、それが本当に大事かどうか知らないけれど、そうした日常にとにかく浸って育ってしまうと、題材選びやテーマ設定が苦しくなるのです。

やめた方がいい題材

ときに、長く探究学習をやっていると、中学生があまり踏み込まない方がいいな、という題材が明らかになってきます。タレント・テーマパーク、心理学・メンタル、オカルト・疑似科学（トンデモ本）などです。詳しくは言いませんが色々あります。どうしてもやりたいと言ってくる場合も少なくないのですが、「どうしてもやりたかったらいいよ、先生を説得しなよ、図書館の本5・6冊積み上げて、その積み上げた本に付箋がびっしり貼ってあったらOK出すよ」と言っています。本気度の確認に付箋は意外と大事です（図書館によっては付箋紙禁止だったりします）。先ほどのコール & レスポンスではないですけども、本に刺激を受けて、付箋紙が芝みたいにいっぱい生えてる、そんな生徒は信用できます。つまり本の知識に対して引っぱりを持って色々読んでいるという証拠があると、先生を説得できるんです。先生が説得できれば、鬼門の心理学もOKです。20人もいれば一人ぐらいは最初に心理と言うんです。「心理学なんかで人の心なんか分かりゃせんのだ」と言うんですけども。ほとんどの子はやめた方がいいよと言われてやめますが、どうしてもとやると言い張る子が稀にいます。その子は「中二病の研究」をしました。その子のクラスに見るからに中二病という子がいたのも動機ですが、「中二病って病気じゃないよね。だけど何かしら特徴があって輪郭があるよね。それって一体何なの？」という問題意識を持ち続けて、心理学の文献をちゃんと読んで、心理学の先生にインタビューをして、中二病はこういう傾向のある子どもじゃないか、みたいな論文を仕上げました。だから心理学とて先生を説得できればOKです。もう一人、「無敵の人」の犯罪心理をやりたいと言ってきた生徒がいました。「やめた方がいいんじゃない？ どうしてもやりたい？ じゃあやったら」と言ったら、本当によくや

ってきました。「無敵の人」の定義が難しいのでちょっと問題はあるのですが、言ってみれば「破れかぶれで無差別殺人をする人」です。なぜそうした人が現れるのかは、大事な問題です。その子はこの題材にたどり着くまで、本当に紆余曲折がありました。それはおくとして、どうしても無敵の人がよいということで、犯罪心理の分野で論文を書き、結構いいところまで行ってます。というわけで心理学といってもケースバイケースです。

「作品論」も難しいです。漫画『寄生獣』が大好きだから「寄生獣」の研究をしたいと言ってきた例があります。「『寄生獣』を読んでいるからといって研究はできないぞ」「どうしてですか?」「寄生獣について書かれた本を読んでも? 文献を読んだ上での研究だよ」、ということを行わないと、中学生はわからない。一番挫折が多いのはジブリです。うちの図書館に「恐怖のジブリ棚」というのがありまして、ジブリとアニメーションの本でだいたい棚一つです。「悪いけど中学生は宮崎駿に近づかない方がいいよ」と釘を刺すのですが、どうしてもと言う。取り組む本人の覚悟次第なのですが、そういうふうには「やめたほうがいい」と言われながらも頑張っ、そこから抜け出てきた生徒の研究は本物になる場合が多いですね。

論文の基礎単位「ピース」

皆さんがいま、生徒の論文の実物を見ていらっしゃると思いますので、ちょっと変な論文だなと思われるかもしれません。独特のやり方なんです。これは論文の基礎単位として「ピース」というものを想定しているからですね。

ピースでは引用の部分が青で、それ以外は地の文というか、意見の部分ですね。事実と意見を明瞭に区別するために色を変えています。自分が何か引用するということは、自分が何かを言いたいのがためです。つまりコメントを書いた

めに引用するのであって、引用が主になってしまったものは論文とは言わないよ、と言うんです。そういうのを「写しました学習」と言います。

このコメントを書くのが本当に大変です。子どもが書いたものに、私たちがダメ出しの嵐を食らわせます。コメントとして要約を書いても構いませんが、引用の下に「つまりこういうことが書いてあって」という要約があるだけだったりする。「それはいいけど、それはいま引用を読んだからわかってるよ」と返します。引用しました、要約しただけでは「お前はオウムか。同じことを繰り返してるだけだ」と。それからコメントの中に「考える」とか、「わかった」とかは書かないように言ってます。「論文では自分が考えてわかったことしか書かないんだから、いちいちそんなことを書かない」とも言います。添削の時そういうのは全部赤ペンで潰していきます。しかし、彼らの筆力はそこまでなかなか到達しません。高度な要求をするなども思いますが、それでもやはり考えたことを言い切って書いてほしいです。

添削ですが、彼らは Wordで論文を書いているので、それを2アップで両面印刷をします。全員で150人から170人分くらいありますが、それを3人の担当者で添削していきます。これが結構厳しい。僕が首からぶらさげているフリクション3色ボールペンは中身が全部赤です。すぐなくなってしまうので困ります。どんどん添削して行って、突っ込みを書き入れます。すると生徒はどうなるかというと、「そんなムリ」となります。確かに厳しいと思います。おまけに、ネットからコピーしたのを貼っていたりすると逆鱗に触れて、各ページに全部斜線が引かれます。彼らもフォントを変えずにそのまま貼り付けたりしますのでバレバレだからです。何ページに渡ってダメ出しすると、その子がカウンターに来て「先生がこんなこと

していいんですか」と食ってかかってきたそうです。そんなこと言っても、あかんもんはあかんです。

こうして嫌がられるのですが、論文の一つ一つ言葉を丁寧に丁寧に読んで添削していくということが生徒の力になります。それでしか文章は良くなっていきません。草稿が出来てきたら子どもたちの間で交換させて添削大会もします。段落なしやフォントの違いのチェックは子どもたちでも十分できるからです。「添削は相手にとって親切なのだから、頑張っって赤くしろ」と言ってやります。正直、僕はもう段落のチェックとか嫌なんです。大学の先生方もそうだと思います。「僕たちはもう中身しか読まないから。段落やフォントが変なのは読まないから」と言ったりします。とにかくそうやって、生徒とのやり取りが続きます。

では、どうしたらコメントを書けるか。自分で考察ができるか。結局は読書なんですね。文献をどれだけ読んだかです。コメントは「冰山」だと思っています。冰山が大きくなるためには水面下の知識の氷が大きくなる必要があります。様々な知識が蓄えられて氷が大きくなると、水面に現れる冰山が大きくなる。だから読書しない者は氷が小さいから冰山も小さいんだと言っているわけです。知識を増やすと、Aという本にはこう、Bという本にはああ書いてあって、AとBの違いは一体何か、共通点は何かが言えるようになります。あるいは本を読みながら、何かおかしいとか。Aに照らしてみるとBの方がおかしいとか。言いたいことが出てきます。そういうちょっとした引っかかりがコメントの元になるのだから、とにかく興味を持った読書です。

ところが伏兵が現れるんですね。保護者です。面白いですよ。保護者が子どもの考えた題材にダメ出しするんです。最近気がついて愕然としました。ある女子生徒がしばしばテーマを

変える。「いいじゃないクラゲ。面白いと思うよ」と言うと、「お母さんがね、『クラゲはちょっとね』っていうんです」って。あるいはさっき出てきた男子生徒の場合は、お姉さんが「やはり税理士がいいんじゃないか」みたいなことを言うらしいんです。お母さんやお姉さんがそんなことを言うからといって、興味もないのに言うこと聞くなよと思います。とはいえ、お母さんやお姉さんの言うことはそれはそれで大事ですから、言うこと聞いちゃうのもわかります。だからどうしたかという、手紙を書きました。「担当教師もテーマに関しては先回りや誘導はしませんから、保護者のみなさまにおかれましては、生徒の主体性を尊重していただきたくお願いする次第です」、とかなんとか。そうすると圧力がすこし軽くなるようです。

これまでも圧力を感じた題材は薬剤師ですね。女子を中心に1学年に最初のうち3人か4人ぐらい薬剤師を考えます。保護者に相談するのかもしれませんが。そこで「薬剤師とかいいんじゃない」とか言われるのかもしれませんが。きっかけとしては悪くはないのですが。とはいえ、薬学の本を見る生徒に「薬剤にどんな興味があるの？」かと尋ねると、ないんです。薬剤に興味はないけれども、薬剤師になることは大事だということだけが頭にある。そういう生徒には、「薬や薬剤師の仕事に興味がなかったらやめた方がいいと思うよ」と言います。「薬学の勉強を6年もするよ、それでもいいの？」と話します。そうすると題材が変わっていくケースは多いです。保護者とあれこれ話すのはいいことだと思います。しかし、なによりも大事なことは自分で決断することです。それが介入でうまくいかないことがままありますね。

探究学習の「華」、フィールドワーク

このように個々にそれぞれ背景があって題材が決まり、夏休みにフィールドワークに行ける

ようになるわけです。フィールドワークに行くためには相手に手紙で、「合わせてください、こんなことをお聞きしたいんです、これまで私はこんな本を読んできました」、ということを書きます。特に文献の一覧をつけることが大事です。実は関大にも結構お世話になっています。ベネット先生だとか、もう何人もの先生にお世話になっているんですけども。手紙の添削も大変です。世の中的に手紙というのはこういうルールだからと、型通りの手紙を書かせます。こうして中学生が手紙を出すと、ありがたいことに大概の先生は受けてくださいます。お話を伺って大学の研究室に行って記念写真を撮ってきたりします。すこしフィールドワークの写真を紹介します。

「おもしろ消しゴム」という商品のメーカーの社長さんにしたインタビューした様子です。「なぜ戦争のない現代で日本刀に需要があるか」というテーマで刀鍛冶の方に会いに行きました。「人工知能はテレビゲームにどのように役立っているのか」のプロジェクトでは、三宅陽一郎さんが書いた本を読んで、ゲームを作りました。その報告を三宅さんにしたところ返事を頂きました。コストコにも行きました。「コストコは日本人の買い物にどのような影響を与えたのか」というテーマでした。はじめに本社の社長宛に手紙を出したら、泉佐野倉庫店を紹介してくれました。アシックスの会社で自分の足の型をとってもらった生徒もいました。「スカイツリーがどのように建てられたのか」の生徒は、スカイツリーを組み立てた現場の総責任者に会いにいきました。とにかく建築が大好きで、よく勉強をしていましたからインタビューの文字起こしを読んでいると、専門用語が多くて、結構深いところで2人の議論が成り立っていて面白かったです。彼は将来こういう方向に行くかもしれませんね。このほか、ラジオのDJやサッカースタジアム、特撮を研究する大

学、助産師の学校などにもお邪魔しました。

今年の例でいくと、152人の生徒のうち50人が手紙を出して、45人が成功しました。勝率は高かったです。今年最初に取材にOKが出たのは東大の副学長の先生でした。ハワイの研究者で、その人の本が面白かったから会いたいと。東京まで行きました。雑誌『anan』の編集長もいます。北島康介にリモートでインタビューした生徒もいます。水泳の記録ではなく、泳ぐ美しさについて研究したいと言うのです。消費税の研究をした生徒はれいわ新選組と自由民主党の大阪府支部連絡会に取材をお願いしました。テーマにするんだったら賛成と反対、両方の意見を聞いた方がいいよねということです。結構このパターンはあって、大阪のカジノがテーマのときは、賛成の維新の会と反対の日本共産党に取材しました。最初は賛成でしたが、話を聞いたあとは「時期尚早」という結論でした。カジノに賛成なのか反対なのか、税制が積極財政なのか緊縮財政なのか、どちらでも構わないのです。勉強して両方に話を聞いて、自分なりに結論を出すのが大事です。

断られたケースも結構ありますが、それを含めてフィールドワークは楽しいです。フィールドワークでテーマが本物になるような場面もたくさん見てきました。フィールドワークまで至った生徒の研究は大概うまくいきます。

そして最後は発表会です。論文ができてさえいれば、発表会は簡単です。今日は修士論文の発表会ですけれども、論文ができていればその要約を伝えるだけなので難しくはない。ポスターを作って発表します。写真には「百人一首はどのようにして競技になったのか」や「仮面ライダーはなぜ戦うのか」といったテーマが見えます。僕は平成仮面ライダーを観ていないんですが、正義と悪と入れ替わったりする結構複雑なストーリーで、正邪が相対的な設定が多いんですね。深いといえば深い。彼は東宝の仮面ラ

ライダーのプロデューサーに会って話を聞いてきました。それで発表会で何をやってるかという、変身ポーズの違いをギャラリーに説明しているんですけどね。発表会、コロナの間はビデオ発表になってしまいましたけれど。

まとめですが、論文作成はとても苦しいです。でもとても楽しいです。生徒の側にとっては「アイデンティティ・進路への影響」、「フィールドワークのよろこび」、「言語技術力等諸能力の向上」、「完成させた達成感」など認められます。一方、学習支援者の側にとっては、端的に楽しいからです。私が長年こんなことをやっているのは面白いからです。辛いばかりでは続きません。「知的対話と達成感のわかちあい」とか「レファレンスのよろこび」とか。やはり知的な対話ができる喜びが大きいかもしれません。そこまでの道のりはやたらと面倒くさいけれども。

4. 探究学習が大切にすること

こうした探究学習が大切にしていることとして、5点挙げたいと思います。1つは「道のり」。プロセス、過程です。学習の過程それ自体が目的でいい。これは学習指導要領にもそう書いてあるんですね。「学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら」と書いてあります。「通して」、「ながら」ということはプロセスですね。学んで考える道のりがあって、そのうえで知識・能力、知識・資質を伸ばしましょう、と書いてある。裏を返せばプロセスがないと資質・能力というのは育成されないよ、とも読めます。つまり主体的で楽しく大変な道のりを経験するからこそ、資質・能力がついてくる。僕自身は資質・能力というのは道のりについてくる副産物だと思います。ですから道のりを欠いた勉強というのは、資質・能力がつか場合もありますけれども、やはり本質的な学びではないなと思っています。

2番目は「著作権」を大事にすることですね。よく著作権が大事だからミッキーマウスの絵は描いちゃダメだというような話になります。それも大事ですけども、自分が著作権者になるという経験こそが大事だと思います。自分が著作権者になって、その成果を盗まれると想像できてこそです。先ほど生徒の著作が図書館の蔵書になった様子を写真でお見せしましたが、これらは図書同様の文化財です。後輩たちがそれを使って学んでいくのです。ただ、著作物の前提として、事実と意見の区別はきちんとしたい。小学生からでもやった方がいいと思っています。小学校の先生は調べ学習のとき、「自分の言葉で書きましょ」とよく言うんですよ。あれがいかんのですね。「自分の言葉で書け」というと、大学生でもWikipediaの語尾を書き換えたレポートを出してしまいます。これからの時代は剽窃チェッカーがありますから、そういうことは出来なくなります。やはり自分のオリジナルなコメントなり考察に価値があるのだということ、子どもの頃から学んでもらいたいと思います。

3番目は「現場」を大切にすることです。これはフィールドワークでもあります。「机上の空論」という言い方がありますけれども、自分が手紙を書いて教えを乞うて、現実に社会の人と出会うとか、コンピューターやゲームや料理を実際に作るから、学びが本物になると思っています。とはいえ世間を見回すと、探究学習と称して「調べました学習」「調べさせられ学習」になっているケースが多いです。それが、先ほど言いました「コスパ・アリバイ学習」、グループでお付き合いの「フリーライダー学習」がびこる原因になります。頭のいい子は、「取り繕いのニュース解説」の場合が多いかもしれません。うちの高校でもSDGs授業をやるのですが、発表会をすると違うグループがよく似た発表をするんですよ。ソースが同じサイトで、写

真まで同じで、結論もまあ似たり寄ったりです。要領よくまとめることが探究学習だと思っている。そうでなくて、個人的な生徒の興味から題材が選ばれて、人と会ったり実物に触れたりするようなプロセスがあって、つまり現場があってこそ、探究学習は本物になるのです。

最後は「多様性」を大切にします。図をご覧ください。生徒の輪と、学習資源の輪、2つの輪が中央で重なっています。生徒の輪、すなわち生徒の能力・個性は当然多様です。中学校は同じ教科書・制服・カリキュラムで学校生活が進むように見えていますが、一皮むけば個性は百人百様です。もう一方の学習資源の輪、すなわち図書館やWeb資料や現場といった学習資源も当然多様で豊かです。多様性のある生徒と多様性のある学習資源をうまく結びつけることができたならば、そこに探究学習が生まれてきます。これは図書館の仕事そのものです。ね。「利用者を知り、本を知り、本と利用者をつなげる」ですね。まさにその考え方です。

図書館というところは、図書館に入ってきた子どもに「この本を読みなさい」と差し出したらしませんよね。図書館というのは「問いかける施設」だと思います。どういうことかという、図書館は、入れば「あなたは何を 읽みますか?」と問いかけてくれる場所なんです。施設の成り立ちから「問い」の形になっている。何を読むかを自分が決断して手に取ることになり。そんなわけで図書館という教育施設は、私の授業と大変馴染みがあり、切っても切れない関係なんです。

ときに、「中学生の多様な興味」と言ったそばからなんなんなんです、実は中学生の興味はそれほど多様ではありません。これは私がこれまで十何年か清教学園で調べてきた結果として言えることです。卒業研究のランキングを見ると、例えば犬を題材にした生徒は累計21人(8.6%)です。1000人の中に8.6人、ざっくり言う

と100人に一人は現れる。そんな割合で犬のテーマが出てくるのです。犬の本が図書館に必ず必要だということが、これでお分かりますよね。同様にして睡眠、自動車、チョコレート、コンビニエンスストア、ゲームもランキングが高いので、これは中学生が興味を持つ対象としてテッパンということが分かります。年ごとに集計すると少しランキングが上下しますが、大体こんな感じ。このデータの見方をちょっと変えて、横軸に順位を取って縦軸に割合を取ったグラフをつくり。すると、上位何位までの本を図書館に揃えると、何%の子どもの需要に応えられるかが想定できます。たとえば100位までの本を揃えると、全体36.9%の需要に応じられる。そして422位まで整えると7割強の需要に応じられる。大まかにそんなことがわかってきます。そして全体で出てくる題材はせいぜい1100分野くらいです。図書館にとっては1100くらいの多様性は大事なことではありません。まして100や400などという多様性に応じる蔵書などもうお茶の子です。ただしお金があればです。学校図書館が自由な探究を支援するのは大変だよね、とよく言いますが、探究を支援する蔵書づくりは予算的にそれほど難しくないので。特に中学生に関しては、全国の学校図書館の年間予算で考えると(全国学校図書館協議会が年間の資料費を小学校で47万円、中学校で59万円と出しています)、その半分で需要の4分の1、つまり50位までの購入が可能と見ています。50位までで占有率が24%、費用が27万円です。ワンテーマ3冊、平均単価が1,800円として計算したものです。残りの半分は物語やその他の本を買きましょう。とはいえ、この予算少なすぎますよね。もっと予算を増やして、倍ぐらいにしてくれれば、あっという間に子どもたちにとって、なんでも学べる学校図書館が作れるはず。自治体や教育委員会に図書館の予算を増やしてください、地方交付税

の交付金をちゃんと使ってください、とよく言いますが、無限に本が必要だというわけではないのです (p.44上図参照)。

最後に、探究学習は「興味」を大事にするということです。当然ですが、研究の題材やテーマは生徒の外部にはありません。自分がワクワクすればそれが正解なのであって、誰かの指図が正解になることはありません。自分の中から正解・納得を生み出す最大の支援が「問い」なんです。資料を渡すとか、論文作法を伝達するとかいろいろ支援はありますが、やはり一番の支援は問いです。「君は何を学びたいの?」と問われるから、生徒は考える。しかも「君は何を学びたいの?」ということは、取りも直さず、「あなたは何者なの?」という質問の形を変えたものです。もちろん、「どんなことを学びたい?」への答えが、「あなたは何者か」に完全に答えるわけではありません。けれども、自分の人格の一部がかならずそれに答えている。つまり「どんなことを学びたい?」と問われて、「鳥が好きで学びたい」とか、「犯罪心理学が大事で学びたい」と答えたことが、その生徒の人格の一部を形作っていくのです。

少し高みからの話になりますが、人生は「あなたは何者か」という問いに答える繰り返しです。自分一人で小さく答えることもあれば、就職活動での企業の選択という形で答えることもあります。そうした答えの先に自分自身が見えてくる。だから、なるべく小さいうちから「何を学びたい?」という問いかけを繰り返したいです。そうした中で、「それはいいね」とか、「あなたが大事に思っているクラゲという生き物については、世の中の科学者がこんなことを今まで考えてきているから読んでみるというと思うよ」というようなことで、本を差し出していくのです。本の世界には、その子の価値観に共鳴する資料(仲間)が必ずあるはずだからです。「先回りをしてない」根拠はここにあります。そうや

って自分で答える道のりのなかでその子なりの人格がゆっくり姿を現していくのでしょうか。

というわけで、私が大事にするキャラクターはソクラテスです。ソクラテスはよく「無知の知」とセットで語られます。問いかけはしてもソクラテスも問いかけられた本人も答えがわからない。探究学習でもそうですよ。子どもが何を題材にするかは先生にも分かりませんし、子どももはじめは分かりません。2人で色々やり取りをしながら、自分は何をしようかを生徒が探り当てる、産み出す。ソクラテスの方法が助産術と言われるゆえんです。時に、ソクラテクスがそうであったように、問いは切っ先が鋭くなる場合もあります。だから題材の決まっていない生徒に授業中に近づいて行って「どう?」と言うと、目を合わせてくれません。液晶画面から目を上げず、「なんもないです」みたいなことを言って、相手をしてくれなかったりします。そこで「何か面白いことがあったら、キーワードが出てきたら、司書と学校図書館があなたが楽しく読める本を差し出すからね」と、待つことになります。

ここで探究学習をめぐる教育の見取り図を示します (p.44下図参照)。これは後から出てくる教育学者の村井実先生の考え方を基準にしています。子どもが自分で目的を決めて学んでいく、その道のりに支援をするこの図が、僕の考えている教育の原図です。その支援の中身に先ほど言った問いだと学び方伝授や資料提供があります。支援に関わる人としては、教諭、司書教諭、学校司書がいます。加えて、公共図書館や現場で出会う社会の人々も子どもたちを手助けしてくれるのですね。…こういうと何かかっこよく、子どもが目的に向けて一直線に学ぶようないい話に聞こえますが、子どもの題材選定やテーマ設定は揺れる風船みたいにふわふわ動いたり、消えたり、色が変わったりする頼りない現象ですので、そのたびに我々は振り回さ

れます。それでも懲りずに支援するのが大事な
なと思います。

最後に挙げるイラストは僕が書いた本のイラストなのですが、遊びで作りました。小さなネコとウサギがはじめに現れます。探究学習をやっていない「今の自分」は何かぼんやりしている。でも、探究学習を試みるとちょっとリアルになる。目つきがそれっぽくなります。一層探究学習をするともっと劇画調にリアルになる。「新しい自分」をバージョンアップさせていくのが探究学習なのだと言いたいです。そして、探究学習が育てる資質は、第一に「読書は楽しくなる」という読書観です。自分が困った時、問題に突き当たったり、興味を持ったりした時に本を読めばそこに手がかりがある。興味のあることを学ぶのは楽しいというのは当たり前のことでしょう。しかし、先ほどから申し上げているように、子どもたちはそれを楽しんでいると思いません。勉強なんて楽しくない手段に過ぎないと思っています。違うんです。「興味のあることを学ぶのは楽しい！」という肯定的な学習観を育ててほしいです。それが第二の資質です。そして、最後が探究学習は「誰かの役に立つ」。これは相互扶助観と書いてありますけれども、要するに自分が作ったものが著作物として図書館の一部分になって誰かの役に立っていくということが大事です。先生に提出して終わりじゃないんです。うちの学校がある限り、作品は後輩たちの役に立つのです。子どもたちにとってそれは大事な経験です。自分の作品が蔵書になったことを図書館のカウンターに確認に来る子がいます。「本棚にないんです」と言うから調べてみると、「貸出中」。そう伝えると、その子がちょっと得意げな顔をして帰っていくのです。自分が誰かの役に立っていることが分かるということが大事です。

5. 探究学習と教育思想

今日は大学院の皆さんの前で話をしていますが、実は私も今から20年くらい前に社会人入学して修士論文を書いて大学院を出たのです。「高等学校における学校図書館を利用した授業の実践的研究：人間主義教育学にもとづく大航海方式の実践と理論」というタイトルです。どうしてそういうことになったかという、就職したのが1987年でバブル全盛のころですけれども、県立高校の理科教師になりました。教師になった翌年から、学校図書館を誰も使っていなかったの、そこで「調べる学習」というか「探究学習」を始めました。十何年授業をしていて、それを『情報大航海術』という本にまとめました。まとめていく中で、やはり学校図書館というか図書館が面白いと思ったんですね。とはいえ、子どもたちの興味は理科や科学に限りませんし、もっと広く知的な関心に答えるのは図書館全体だろうと考えました。そこで、東京学芸大学の図書館学教室に入りました。無給でしたけど学術研究休職という制度があったんです。休職のためお金は貯めましたが、当時結婚もしましたので休職中はかみさんに食べさせてもらったんですね。ところが、2年で研究がまとまらず、というか大学院の居心地がよくて、2年の研究が3年になり、修士論文を書いて現場に戻ってきました。現場に戻ってしばらくして、探究科というものを清教学園高等学校に作るから来ないかと誘われました。それで、神奈川から大阪に来たんです。

ではなぜ「学校図書館を利用した授業の実践的研究」をしたのでしょうか。探究学習をはじめたころは、まだ総合学習が出てくる前です。でも、子どもたちが自分でテーマを決めて学ぶことは大事だと確信していました。自分自身が自由研究少年であったせいもありますが、海洋生物学を専攻した大学の卒論でその確信が強まったんですね。授業を続ける中でも、自分の授

業と同じ考え方をする人が教育学の中に誰かいるはずだと思って、資料を読み漁っていたんです。そこでたどり着いたのが、村井実先生でした。慶應義塾大学の教育哲学の先生です。その方が書いた本に非常に共鳴しました。彼の教育の定義が「子どもをよくしようとする働きかけ」です（「善く」と書く場合もあります）。この定義だったら僕はついていけると思いました。先生には多くの著書がありますが、それを読み込んで修士論文の論理の核に据えました。ふりかえって、村井先生のみならず、やはり探究学習が大事だと思っている人は昔からいるわけです。何よりもジョン・デューイです。学校図書館の始まりはジョン・デューイと言われます。それから意外かもしれませんがカール・ロジャーズです。ロジャーズはカウンセリングで有名ですけれども、彼は教育の本も書いていて、彼の書いている教育論に共感しました。さらに文章に厳しいのは宇佐美寛さんの影響ですね。宇佐美さんはもうぐったりするほど厳しい人ですけれども。ともあれ、様々な先達の影響を受けて論文を仕上げました。

その後現場に戻ってあれこれやっていますが、いずれも修士課程でやったことが原点です。その後のことは全て変奏曲なんです。パリエーションに過ぎない。時代が変わって探究学習も盛んにおこなわれていますが、原点からはずれることはありません。村井先生やデューイやロジャーズが考えているようなことを世の中でもやってくれているなと思っています。最

近味方だなと思ったのは構成主義とかバカロレアのカリキュラムです。バカロレアのカリキュラムはインターネットで読めますが、あの論文指導の苦労はよくわかります。

6. おわりに

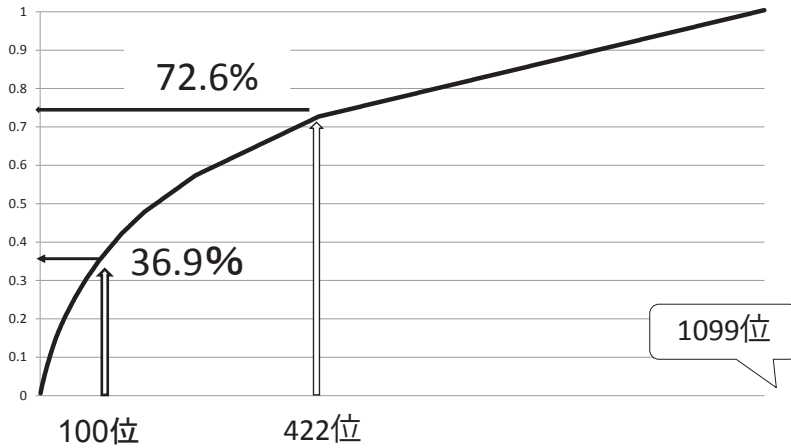
このようなわけで、大学院で学んだことが自分の原点となりました。自分の考える「教育とは何か」を、時間がある中でとことんまで学んで考えて、しっかりアンカーを落として下さい。それが、その先何を自分がやっていくかの原点になるからです。修士論文を書かれている皆さんには、この機会にまた頑張ってくださいと思います。

最後に少し宣伝です。清教学園リブラリアはTwitterをやっています。フォロワーが増えるということが図書館を守るということにも繋がるので、フォローをお願いします。

現在、私は図書館振興財団というところに勤務しています。清教学園は非常勤講師です。財団は「図書館を使った調べる学習コンクール」という、探究学習のコンクールを主催しています。毎年10万人ぐらいが自由にテーマを決めて学んだ作品を作って送ってくれます。立派な作品が生まれていますが、僕が狙っているのは探究学習の裾野の拡大です。日本中の子どもたちに自分でテーマを決める学びを楽しく繰り返してほしい。自分にとってこれは重要な仕事と思っているので、コンクールの宣伝をさせていただきました。そして機会があればぜひ見ていただければと思います。以上です。

上位400位でテーマを7割カバー ランキング順位と占有率

順位と占有率 (パレート図)



探究学習をめぐる教育の見取り図

